

⑦ 譜系の協同

第1部 川崎 平右衛門

田中丘隅に学ぶ

尊徳と結び付ける縁

木曾三川での薩摩藩による室
曆治水は、大樽川(おおくればが
わ)洗堰(あらいせき)、油嶋
縮切そして逆川縮切が大きなポ
イントとなった。三川の分流工
事は上流域での川床の上昇を招
く危険性があることから、川崎
平右衛門はこれに対処するた
め、牛牧開門(うしきこうも
ん)の建設に取り組んだという
構図になるようだ。

大樽川について平右衛門は寛
延3(1750)年に食違堰
(くいちがいぜき)を完成させ
たが宝暦5(1755)年、薩
摩藩により別途「薩摩洗堰」が
設けられた。これは完成間もな
く宝暦5年の出水で決壊流出し
たため、宝暦8(1758)
年、あらためて全面石築の洗堰
が築造されている。

「こうして被害が緩和されるよ
うにはなったが、以降も毎年の
うにはなったが、以降も毎年の
うにはなったが、以降も毎年の

身をもって水害体験

ところで、水を有効に活用す
る利水が中心の武威野新田開発
で功績をあげた平右衛門が、な
げ治水巧者として治水工事に当
たることになったのか。平右衛
門は多摩郡押立村(現府中市)
の出身であり、押立村そばを流
れる多摩川は「あばれ多摩川」
と言われ、水害の常襲地帯であ
った。小さい時から頻発する大

農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一

小の水害を身をもって体験し、
水害への対応・対策を現場で学
んできたものと思われる。
さらに平右衛門は新田世話役
になって3年目の寛保2(17
42)年に、江戸時代の三大洪
水の一つとされる「寛保の洪水」
に遭遇している。関東・信州を
中心に水害が発生したもので、
全国で1万人以上が死亡したと

される。この水害の修復に当た
り、担当代官の1万両、専門役
の8000両の見積もりに対
し、平右衛門は4000両とし、
追加で2000両あれば今後10
〜20年は工事不要にできると申
し出て任され、見事に工事を完
成している。これが幕府の高い
評価を獲得することになる。

田沢家通じ丘隅知る

川崎家は北条氏に仕えてきた
武士の家系であったが、母方の
田沢家は多摩郡菅生村(現あき



妙光寺の墓前にある田中丘隅の案内板(川崎市幸区)①と川崎市内を流れる多摩川



①と川崎市内を流れる多摩川

る野市)の名主で祖先は甲州の
武田氏に仕えた。この田沢家は
「多摩川流 治水巧者たちの総帥
とされる田中丘隅(きゅうごま)
と深い縁があったとされる。
丘隅は農政・民政についての
意見書『民間省要』の著者とし
て知られる。多摩郡平沢村(現
あきる野市)の出身で、その働
きぶりと才覚を見込まれて川崎
宿の本陣名主である田中家に夫
婦養子に入って川崎宿の立て直
しを果たす。50歳で隠居し江戸
に出て勉学を重ね、『民間省
要』を著し、これが幕府に認め
られて享保8(1723)年、
支配勘定並(ならび)に抜てき。
荒川、多摩川、酒匂川(さかわ
がわ)などの治水にも当たる。

平右衛門は田沢家を通じて丘
隅を知り、治水に関する知識・
技術を習得したことが推測され
る。平右衛門にとって治水に関
する師は実質、丘隅であったの
ではないかと思われる。

二宮尊徳は『民間省要』に大
きな影響を受けたとされ、丘隅
によって平右衛門と尊徳がつな
がって行くのである。

(次回は25日付)